



## 〈恋に恋する頃を過ぎて〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

今でも偏見はなくなっていないが、今世紀初頭、たった十五、六年前のアメリカの大都市では、異性間以外の恋愛は公にはできなかった。恋愛は、男と女がするのが当たり前とされていた。少女がうっとりとして夢みるのは、白馬の王子や強くて優しいボーイフレンドだった。

この映画は、グレッタ・ガーウィグ監督が大好きな故郷での自分自身の姿をふり返り映画化した。フィクションだが、幼少期から巣立ちに對する想いにつながる核心部分は実話であるという。

二〇〇二年、カリフォルニア州サクラメントの女子高校生クリスティン(ローナン)は自らを「レディ・バード(テントウ虫)」と名乗る夢多き少女。高校最終年で、母マリオン(メトカーフ)は地元で進学させたいのだが、本人は息苦しいカトリック系高校から解放されて「文化のあるニューヨークとかニューハン

プシャーの大学がいい」と口走り、大喧嘩になる。母と娘は、心の中では信頼し合っているのに、よく話し合う前に互いに結論を先に言っては喧嘩を繰り返している。

ある日、ミュージカルのオーディションを受けに行つた先で、気になる素敵な青年ダニー(ヘッジズ)と知り合う。練習を重ね、高校のダンスパーティーで踊つた後に初めてキス。帰り道、うれしくて思わず叫んでしまうクリスティン。星降る夜は二人で野原に寝転んで星に名前をつけたり、感謝祭の日にはダニーの祖母の豪邸に招かれたり、一緒にライブに行つたり、恋ってこんなに楽しいの、と有頂天。

だが、ミュージカル本番の日。無事に舞台を終えた後、クリスティンは偶然、ダニーが男子とキスしているのを見ってしまう。ショックで気絶しそうになるクリスティン。それまでダニーは本当

の自分を隠していて、究極的には彼女に性的な興味はない。でも、元気で自由でユーモアのあるレディ・バードは好きだから、仲良くしたい。彼女の理想に合うような、完璧なボーイフレンドになりたい、と心から願う。だが…。

二〇〇二年当時のこの街では、いや、どこの街でも、LGBTという言葉も、ましてその権利など知る人はなかった。恋に恋する年頃のクリスティンは、ただ失恋した。そして、すぐに立ち直つた。ダニーと対照的なクールな美少年カイル(シヤラメ)と知り合つて、生まれて初めて圧倒されるほどの性的魅力を感じたのだ。

その後、ダニーが彼女に会いに来たとき、ふいにダニーには彼自身の人生があるのだ、との思いにとらわれる。それは、ふたりが性を越えた強い友情を結ぶ確信となつていった…。

この映画は、レディ・バードが多感なティーンエイジャーから自分の人生の選択へ向かつて大きく羽ばたいてゆく姿を、家族や友情や恋愛や現実との関わりの中で清々しく描いている。多様な性のあり方も、多様な人生のあり方として受け入れる成長の姿として描く。まぶしいほどの青春の輝きと痛み―若き演技派ローナンの面目躍如だ。



## 『レディ・バード』

アメリカ映画 (94分)

監督: グレッタ・ガーウィグ

出演: シアーシャ・ローナン、ローリー・メトカーフ、ルーカス・ヘッジズ、ティモシー・シヤラメほか

公開中

© 2017 InterActiveCorp Films, LLC./Merie Wallace, courtesy of A24